

## 宮崎・高鍋宣言

日本の優れた子育て文化・福祉文化を守りましょう。

2016年（平成28年）改正児童福祉法において、我が国においても社会的養育の家庭養育優先原則が明記され、その後厚労省の出した「ビジョン」（2017年）では、里親委託率を英米並みに引き上げる方向性も明示され、現在、各都道府県において、年度末までの策定をめざして推進計画が検討されています。

家庭・里親・施設・地域、そして関係機関が、互いに連携・共生し合いながら、子どもを社会みんなで守り育てていく、新たな社会的養育・養護の仕組みを作っていかなければなりません。

問題は、「ビジョン」で、乳幼児の施設への「新規措置入所を停止」や、施設の滞在期間を「乳幼児は数か月以内、学童期以降は1年以内とする」など、施設否定論が展開されており、重大な勇み足をしているということです。先人達が命をかけて築いてきた日本の社会的養護の歴史否定でもあり、無謀な政策です。

アメリカやカナダ等においては、施設否定が進み、過度に里親依存が進行した結果、里親が職業化したり、「ドリフト」と呼ばれる里親間の子どものたらいまわし（漂流）が発生しているという、関係者からの指摘、「日本はマネをするな」という助言もあります。施設を否定し里親委託率を上げようとする方策は、危険であり、児童福祉の精神にも反するでしょう。

子どもは決して、制度・政策やマニュアルによって育つわけではありません。それぞれの地域の文化・自然・暮らしの中で、生活習慣や自立力を身につけていきます。日本には、日本独自の伝統的子育て文化があり、私達児童福祉の先人達は、社会的養護・養育においても、その文化に根差した福祉文化を築き上げてきました。

地域や家庭の養育力が弱体化し、虐待やネグレクト（育児放棄）が急増している社会の中で、また一般家庭においても「家庭」が機能不全に陥っているケースの多い状況の中で、その福祉文化が「家庭」のモデルに成り得る時代となりつつあるのではないのでしょうか。

先人達が築き上げてきた日本独自の子育て文化・福祉文化とは、例えば以下の3点です。

- ① 「おんぶに抱っこ、添い寝におっぱい」と表現される、日本独自の受容があります。日本人は「三つ子の魂百まで」の教訓の通り、乳幼児にしっかり愛情を注いできました。施設職員もできるだけスキンシップし、一緒に入浴したり添い寝したりするなど密着した関係性の中で養育をしてきました。欧米の個人主義的養育とは随分違います。今では、一般家庭の模範たりえます。
- ② 集団の力動をうまく活用することが、日本独自の子育て文化です。今ではその弊害だけが強調されますが、アメリカ個人主義の影響でしょう。高校野球や大学駅伝等、師弟同行の寝食を共にする生活から、生活習慣や自律力や志を身につけます。我が国の児童福祉施設もその文化を大事にしてきました。相互作用の中で子どもはたくましく育ちます。

③ 日本では、施設の子ども達も施設職員もその家族も、大家族のように同じ屋根の下で一日 24 時間、年間 365 日、一緒に生活してきたという歴史があります。言わば大家族主義です。今も利用者と職員との距離は近く、家族的絆でつながっていたり、師弟関係で同じ志を抱くなどの関係が築かれていたりします。また利他的精神で利用者家族とも付き合っ  
て来ています。

以上のような子育て文化・福祉文化が日本の施設には存在します。そして、子どもは施設でも立派に育っています。各自治体においても今後、施設否定論が展開されると、施設崩壊は欧米のように進んでいくと予想できます。そしてこのような子育て文化・福祉文化も消滅します。今後、子ども達が漂流していかないように、施設養育もしっかり充実強化させていく必要があります。「ビジョン」にある乳幼児の『入所停止』や、施設の『滞在期間制限』は、取り下げるべきです。

どのような環境の中で生まれようとも、子どもたちには未来があり、その未来を作る権利があります。たとえ不利な環境に生まれたとしても、その運命を変えるための最善の利益(チャンス)が保障されなければなりません。強引な政策は、最善の利益を損ないます。少子化・人口減少という我が国の時代状況の中で、子ども達一人ひとりが地域の貴重な人材となり得ます。家庭で育とうと里親宅で育とうと施設で育とうと、その人生に差はありません。

私達は、グローバル化するこの社会の中で、欧米の価値観に流されることなく、先人たちもやったように、しっかり新たな文化の融合に挑戦します。家庭・里親・施設・地域、そして関係機関とが連携・共生しあい、日本独自の子育て文化・福祉文化に新たな価値観も融合させ、また、妊娠期から青年期に至るまで切れ目ない新たな支援のあり方も探りながら、次世代の子ども達を養育・教育していくことを誓い願い、各自治体にもその一貫した支援体制作りを求めます。

以上、石井十次生誕の地、宮崎・高鍋の、「石井十次セミナー」において宣言します。

2019 年（令和元年）8 月 25 日

叶原士筆

藤野興一

尾崎草次郎

潮谷愛一

菊池義昭